

ぶらっとサロン椿通信 令和3年1月増刊号



今号の椿 七福神弁天(しちふくじんべんてん)

報告:有楽齋

毎週火曜日の午後1時過ぎから午後4時半ごろまで、朝日2丁目集会所で「健康麻雀ミーティング」をワイワイガヤガヤとやっていたのですが、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、昨年3月10日から自粛し**現在休局中**です。発刊から1年を経過し今号よりタイトルに『椿』を加えました。

万葉の花 ツバキ つらつらに見つつ思う古の春野

名花を万葉集の歌とともに紹介する「万葉の花」。今回はツバキ。日本原産で霊力のある樹とされ、堅い材や緑の葉、種から採る油などが有用植物として利用されてきました。また観賞用にも親しまれ、ヤブツバキは世界の多くの品種の親となっています。

NHK 趣味の園芸 2020年12月号より



坂門人足

よみ

巨勢山(こせやま)のつらつら椿つらつらに見つつ思(し)のはな巨勢の春野を

作者 坂門人足(さかとのひとり) 巻一・五四
現代語訳

巨勢山に 列々(つらつら)と連なる椿を 熟々(つらつら)と見ながら 愚(し)のぼうではないか
巨勢の野に 椿の花が咲くありさまを

ツバキの特徴 ① 厚く光沢のある葉 厚葉木(あつばき)・艶葉木(つやばき)・光沢木(つやき)

② 花の少ない時期に咲く ③ 落ちツバキ 咲き始めから 落ちた後まで 楽しめる花

※世界で5000品種位登録されている(7~8割がヤブツバキ系) ※木づち・ツバキ油・ツバキ茶 余すところなく利用 ※「万葉集」紫は灰指すものそ海石榴市(つばいち)の八十(やそ)の衢(ちまた)に逢(あ)へる児(こ)や誰(たれ)(巻十二・三一〇)はツバキの枝葉の灰(山灰)が黼葉(くも)や紫染(むら)の媒染(ばいせん)剤(ざい)に使(つか)われたことが背景にある ※ツバキは1年中青々とした神聖な木とされてきた 2020年12月13日Eテレ放映(趣味の園芸)より



香椿(3月末の新芽は薄桃色)

「椿」の字は中国ではセンダン科の落葉樹である香椿(ちゃんちん)を指し、この字をツバキに当てるのは日本語独自の用法です。古代の阿波国府の推定地である徳島市の観音寺遺跡からは「椿 ツ婆木」と書かれた木簡が見つかっており、辞書か音義(発音の注釈)の抜き書きとみられます。この木簡は7世紀末~8世紀前半ごろの土層から出土し、上記の歌とほぼ同時期のもので、当時「椿」がツバキと訓読みされていた**確実な証拠**となります。春に早い時期から咲き始めることから「春を呼ぶ花」「新しい年を寿ぐ花」とされ、「春を告げる花木」の意味でこの字があてられたと考えられています。

NHK 趣味の園芸(R2.12月13日放送)内で紹介された椿



菊冬至(きくとうじ)
ヤブツバキ系



参平椿(さんぺいつばき)
ヤブツバキ系



白妙(しろたえ)
ユキバタツバキ系



松波(まつなみ)
ユキツバキ系



紫炎(しえん)
ユキツバキ系(米国産出)